The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 自閉性障害幼児における愛着行動の形成についての縦断的研究 : H式障害幼児評定尺度 「HRSH」 による |
| Author(s) | 広利, 吉治 |
| Citation | 大阪大学, 1992, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/37851 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【60】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 広（ひろ）　利（とし）　吉（よし）　治（はる） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（医　学） |
| 学位記番号 | 第　10021　号 |
| 学位授与年月日 | 平成4年2月4日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 |
| 学位論文名 | **自閉性障害幼児における愛着行動の形成についての縦断的研究**<br>**—H式障害幼児評定尺度「HRSH」による—** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教　授　西村　健<br>（副査）<br>教　授　岡田伸太郎　　教　授　白石　純三 |

## 論文内容の要旨

〔目　的〕

自閉性障害幼児に対する治療教育の一環として，保育所における統合保育の効果については，諸家の研究から様々な結果が報告されているが，その指導法はまだ確立されたものはなく試行錯誤の段階である。

我々は，統合保育における一指導法として，「集団内マンツーマン保育」の試みにより，保育者と自閉性障害幼児との間に愛着行動が形成されるのを確認することが出来た。本研究では，このような愛着行動の出現および発展，そして，その他の領域との関連性を把握し自閉症児の療育指針の検討を行う為に，我々が作成した「H式障害幼児評定尺度：HRSH」（広利，渡辺，松本，西村　1986）に含まれる5尺度　1.社会的行動尺度（以下SO尺度）2.愛着行動尺度（AT尺度）　3.注意喚起行動尺度（GE尺度）4.弧立性尺度（IS尺度）5.固執性尺度（IN尺度）について，自閉症児と発達遅滞児の発達年令，および健常児の歴年令を統一し三者間における横断的および縦断的研究を行ったので報告したい。

〔方法ならびに結果〕

まず，横断的研究としてHRSHの5尺度について，尺度得点間の相関と平均値の有意差の検定を行ったところ，平均発達年齢が1.82才の自閉症児（DSMⅢ）は，平均年齢1.93才の健常児と同じ出現頻度の愛着行動を示し，両者間の有意差は見られなかった。また，発達年齢が同レベルの発達遅滞児よりも僅かに高い頻度（$P < 0.25$）を示した。また，注意喚起行動尺度ではわずかに発達遅滞児が

高い値（p＜0.25）を示し，健常児はさらに高い値（p＜0.005）を示した。

次に，縦断的研究としては，自閉症児と発達遅滞児それぞれの2回データから平均値の差の検定を行ったところ，自閉症児の弧立性が強くなる傾向（p＜0.25）と，愛着行動と同次元の行動である注意喚起行動の増進（p＜0.25）が認められた。さらに，自閉症児と発達遅滞児を一括（以下障害幼児群と呼ぶ）した64名を対象とし，2回の評定データを別項目として扱い，発達指数と年齢を加えた55項目に対して因子分析を行った。因子分析は主因子解からVarimax解を求め，さらにPromax法により斜交解と因子間相関の算出を行った。抽出された8因子は，1.身辺処理因子　2.社会性因子　3.愛着行動因子　4.言語性因子　5.偏食　6.動作性知能因子　7.特殊因子　8.緊張性因子であり，それぞれについて因子構造の縦断的解釈を行った。

次に，因子構造について健常児との比較を行ったところ，社会性は障害幼児では，社会性ー弧立性といった同一次元上での二極的布置をなしたが，健常児においてこの2因子は，それぞれ独立した次元として抽出された。このことは，障害幼児の弧立性は社会性に拮抗する病理的行動として把握し，社会性次元の方向へアプローチしてゆかねばならないことを示唆しているものと考えられる。

〔総　括〕

情緒的交流の乏しい自閉症児には，愛着行動が育ちにくいと思われがちである。しかし，今回対象とした自閉症児については，相当保母を固定し集団内マンツーマン保育を行ってゆくことにより，発達年令相応の愛着行動と同一次元上の行動としての注意喚起行動の増進が認められた。さらに，自閉症児において，社会性・注意喚起行動・発達指数，三者間に0.7～0.8の高い相関が得られたが，これは「愛着の絆」が形成・強化されることにより，対人関係の改善や社会性の向上につながることを表しているものと考えられる。また，障害幼児群を対象とする因子分析から，因子次元内における項目布置について縦断的な検討を行ったところ，社会性の2度目の評価項目（SO2）が，愛着行動(AT)と注意喚起行動（GE）を要素とするクラスターへ向かって移行および接近していることが認められた。この構造的変化は社会性の質的変化が因子空間上に投影されたものであり，上記の結果をさらに支持するものであると考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

障害児保育が開始されてから既に15年以上経過したが，科学的根拠に基づいた指導方法についての研究は少ない。特に自閉症児の統合保育における有効な指導法についての研究はほとんどなされていない。

本研究においては，統合保育形態におけるマンツーマン保育の妥当性の検討を行う為に，さきに開発した「H式障害幼児評定尺度」により明らかにされた対人的愛着行動について，障害幼児（自閉症児，発達遅滞児）と健常児との縦横断的比較を行い，自閉症児が健常児と同レベルの愛着行動を示す

ことを明らかにした。更に，因子分析により抽出された愛着行動因子が特に社会性因子及び注意喚起行動因子と密接な関係を有することを示した。

これらの結果は，指導の難しい自閉症児の社会的行動の獲得にとって，愛着行動の形成が有効に働くことを実証し，その指導法に科学的根拠を与えたものであり，学位に値するものと考えられる。